

を見回しながら、ふと、住宅街に続く石畳の小路に踏み入ってみた。両側の落着いた構えの家々が、風通しのいい、快い日陰を作り、カナートで運ばれる冷たい水を求めてそこで一服する人々がいる。

その傍に、大だらいに果物を並べて売っているおじさんが一人。映画でよく見ると手投弾みたいな大きさ、形のもので熟して黄色くなつたのを氷の塊りの上で冷やしている。近所の子どもたちが、小銭を握りしめて走ってくる。よくよく品選びして、コレッと指さす。おじさんはホイッと包丁で突き刺し、クルッと皮をむいて渡す。それをすぐさま、パクツと口へ。よし、私も試してみよう。よく熟んだ大きいのを指さした。ホイツ、クルツ、パクツ。ウーン、ま、あけびのような味、舌触り。小さい種があるのまで似ている。種は飲み込むようだが、私はあかんわ。こんなところで盲腸にはかかりたくない。「おじさん、これ何ちゅうもんや?」「マダム、これはサバ・ラいうもんや」一個三〇円くらい。ムツシユー、嬉しかったの

か見知らぬマダムに椅子（携帯用）の埃を払って勧めてくれた。「マダム、シャイ（茶）を飲むか?」灯油バーナにやかんをかけて、沸騰したところへ紅茶をパツ。次に砂糖をサツ。ハイ出来上り。ガラスの小さなコップの一杯の熱々のシャイ。灼熱の国の風通しのよい日陰の小路で思いもかけぬティータイム。真青な空、ニコく笑っているおじさん。おじさんはアラビア語、私は京都弁。お互い通じる言葉?は英語とアラビア語の一から十の数字だけ。

瞑想の音楽

最近、メタムジークとか、ミニマル・ミュージックとか呼ばれる新しい傾向の音楽が台頭しはじめた。

ベルリンで開かれたメタムジーク・フェスティバルがその発端のようで、この

× × ×
こんな出会いが忘れられなくて又々、トランク片手に飛び出して行く。それではムツシユー・サバラ、アツサラーム。



街中をゆく背広の紳士

（えぐちのりこ 心理クリニク・センター）

稲垣 静一



程来日したフェスティバルの企画者ワルター・パツハウア氏の話によると、これまでのヨーロッパ中心主義的な音楽という概念を超えた音楽、あるいは超えるという認識の上に立脚しているようだ。会

期中、非ヨーロッパ的な音楽が数多く紹介され、特に反響を呼んだのはアメリカのステイヴ・ライヒや、テリー・ライリーらのミニマル・ミュージックであったようである。

極小の音楽素材を意味するミニマル・ミュージックは、単純なリズムを執拗に繰り返し、そこに微細な変化を醸成しながら、いわば、モアレ現象のように様々な音の斐を織りなす。この単純な音の繰り返しは自己完結的な呪術的效果を發揮し、そこに没入すれば催眠状態から恍惚を誘う音楽である。

この極めて単純素朴な音楽のあり方は、高度に発展してきたヨーロッパ音楽を原初的な音楽の姿に還そうとしているかのように、呪文的であり、祈りでもあり、また神秘的な儀式でもある。いわば古代的音楽の復権なのだろうか。

日本においてもメタムジックの影響を受けてか、佐渡ヶ島の鬼太鼓や諏訪大社に伝わる御諏訪太鼓などの原始的なリズムと、そのバイタルなところが受けてい

る。確かに日本はメタムジックの宝庫なのだが、声明もまた、その筆頭に挙げられるであろう。

声明と言つても繊細な装飾を施した天台声明の、高度な個人的ヴィルトオーソなものよりか、浄土声明の「日中礼讃」のように、少々荒削りなところがかえって旋律のユリヤソリを誇張させ、フレキシブルな演奏の余地を与えている。特に多勢で合唱するとき、唱者ひとりひとりの呼吸のズレや、わずかな音程の差異が幾重にも重なり、多重的な層をつくり出す。その複雑、かつ微妙なトーン・クラスタのヘテロフォニーの響きはメタムジックの極地であると言える。

ミニマル・ミュージックに近い声明としては、誦経が挙げられるであろう。漢文で書かれた「仏説阿弥陀經」を具音で早く読んでいくわけであるが、その音楽構想は一つの音程という限られた素材で、一音一字かなり早いテンポで連唱する。割筈という拍子木が四字、三字、二字の句の前毎に異なった強度の音を刻み込み、

次第に間を縮めアツチェルランドしつつ、やがて凄じい速さとなる。この速さに至つては、經典の言葉も意味も激しい情動の渦の中に消えてしまう。まさにロゴスとパトスとの一体化である。そこでは仏教思想が即音楽構造を生み出し、単なる呪文性や神秘性からくるエクスタシーの状態にとどまらず、カタルシスへと昇華する点において、真の芸術的価値を見出すのである。

形式的に規格化され、慣習化されてきた今日のコンサート・セレモニーからとくには逃れ、大伽藍の中で、静かに声明に耳を傾け、瞑想に耽るのも、近代的なコンサート・ホールでは味わえないメタフィジカルな音楽体験となるであろう。

光りと香り、そして妙なる音の漂う浄土の世界を夢想し、浄土に鳴り響く八つの音、「清」「揚」「哀」「亮」「微」「妙」「和」「雅」の音を心に描くことができたら、これこそまさに瞑想の音楽ではなからうか。(いながき せいいち 文学部助教)